

小学校教育における砂場の活用に関する検討

— 遊びの事例と学習指導要領をふまえて —

山崎 幹子¹⁾ 圓入 智仁²⁾

Examining the Use of Sandboxes in Elementary School Education : Based on Play Cases and Course of Study

Mikiko Yamasaki¹⁾ Tomohito Ennyu²⁾

(2022年12月12日受理)

1. はじめに

平成8年度の幼稚園設置基準の園具・教具に関する規定が大綱化されるまで、砂場は設置義務化されていた。そのため、園庭がある幼稚園や保育所、認定こども園などの多くには、現在でも砂場が設置されている。その砂場や園庭において、子ども達は砂を使って遊び、様々な経験を積んでいる。ところが、幼稚園や保育所、認定こども園などから小学校に進学すると、子ども達が校内の砂場で遊ぶことに関する報告は、管見の限り見当たらない。小学校の「砂場」は、例えば体育の走り幅跳びの着地場所としての利用であり、子ども達が砂場遊びに没頭する場所ではないようである。

砂場遊びでは多種多様な経験を積むことのできる場所として、多くの研究がある。例えば、「砂遊びに関する研究動向と今後の展望」(箕輪 2011)には、「幼稚園教育要領(2008)には『自発的な活動としての遊び』という文言が掲げられているが、砂場が<子どもの自発性>を大切にしようとする試みから普及していったことから、砂場が保育環境として重要な役割を果たしていることが示唆される。」とあり、砂場で環境の重要性を指摘している。

また、「幼児教育における『砂場』の教育的意義に関する研究—幼児の育ちを捉える視点と環境を構成する視点—」(小谷 2013)は、「幼児教育における砂場がもつ教育的意義について、幼児が遊ぶ中で、多様な育ちが見られること、つまり、多様な保育内容(保育のねらい)が包括されているという観点から、科学性の芽生えや、様々な育ちの視点がわかり、『遊びを通した総合的な指導』の場として、砂場が大きな意義をもつものであることを推察できた。」と述べている。砂場で遊びの経験から科学性の芽生えが生まれることなどを指摘してい

る。

小学校学習指導要領(平成29年3月告示)においても、総則に学校段階等間の接続について、以下の記述がある。

(1)幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。

ここでは、幼児期での経験がその先の学習での学びに関連し、影響を及ぼすことを示唆している。特に、上記にもあるように「自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたこと」が重要であり、子どもの興味関心が、学習に対する意欲に繋がっていくことが円滑な接続になることを述べている。

幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきた砂場遊びは、小学校における学習活動にも密接に関係していると考えられる。例えば、砂の乾いた部分と湿った部分の違いに気付くことで、水分量や太陽の日照について知るといった理科的な着眼点に繋がることが

考えられる。このように、砂場遊びにおける子どもの経験の分析を踏まえて、小学校学習指導要領（平成29年3月告示）を、砂場遊びの文脈で捉え、小学校における砂場の積極的な利用方法や、学習を促す事例を提示し、砂場の有用性を明らかにする。また、小学校学習指導要領（平成29年3月告示）の内容を砂場で対応できるか、検討する。

本研究は、幼稚園・保育所・認定こども園・小学校連携の一環に位置付けることができる。先行研究では、子どもが幼稚園や保育所で経験した砂場遊びを、小学校の学習に結び付けることができず、そのさきがけとなるだろう。また、幼稚園における砂場遊びの観察を、小学校学習指導要領（平成29年3月告示）との関連で検討する。このことは先行研究にはない視点であり、本研究の独自性でもある。

本研究では、小学校学習指導要領（平成29年3月告示）の「生活科」と「理科」について、砂場遊びで対応できるのか検討する。特に低学年の「生活科」は社会生活のルールや身近な人との関わりを養うことを目的としているため、砂場遊びの中での経験も関連していると考えられる。また、「理科」については、科学的な考えを砂場遊びの中で培えると思われるためである。

「生活科」については、具体的な活動や経験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、生活を豊かにするために、砂場遊びでの活動や経験が、子どもの育成にどのような影響を及ぼすのか考える。「理科」については、自然の事物・現象についての問題を科学的に解決する資質・能力や、知的好奇心を育成するために、砂場遊びの経験がどのように活かされるのか検討する。なお、「生活科」は小学1年生と2年生のみの教科、「理科」は3年生からの教科である。

2. 方法

(1) 観察方法

N大学付属I幼稚園の園庭に設置されている砂場遊びの様子を、以下の通り行った。令和2年7月から10月までの、のべ39日間、朝の好きな遊びの時間（およそ9時30分～11時）の中での様子を、ビデオカメラ2台（定点撮影と観察者手持ち撮影）で観察した内容を記録した。撮影中は子どもの砂遊びに集中する姿を撮影するために、妨げにならないよう留意した。

(2) 分析方法

「生活科」と「理科」のそれぞれの教科における目標または、各学年のねらいや事項を、砂場遊びの事例を見ながらそれぞれどのようなことが子どもに影響を及ぼし

たり、関連したりしているのか検討する。

事例の中では、砂場で遊ぶ子どもの表記を、学年と男女の別にアルファベットで分けている。年長男児は●、年長女児は○、年中男児は◆、年中女児は◇と表記している。また、事例を区切っている部分はその日の遊びを細かく分け、部分ごとに表記しているためである。

3. 生活と砂場遊びについて

ここでは「生活科」に関して学習指導要領が示す事項を、砂場遊びで対応できるか検討する。

(1) 生活科の目標

生活科で育成することとされている、3つの資質・能力のうち、砂場遊びに関わると考えられるものは、以下の2項目である。

1つ目の育成することとされている資質・能力は「(1) 活動や体験の過程において、自分自身、身近な人々、社会及び自然の特徴やよさ、それらの関わり等に気付くとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付けるようにする。」である。これに関する砂場遊びの事例は以下の通りである。

表1. 「裸足になって遊ぶ」

〈7月8日(水)曇りのち晴れ(大雨後)〉

事 例
●Fと○Kは足で周りの溝を固めたり、スコップで掘ったりしている。
◆Cはどこかで作ってきた泥団子を、持っている。○Kが裸足になって戻ってくる。
○Kは山の斜面に足を置き、「○K、あしでほるけん」と言って、裸足で山や溝を歩く。

自然の中での遊びや、その遊びの楽しさを経験することで、ルールや人との関わり方を身に付けたり、知識及び技能の基礎を学び、生活習慣を身に付けたりすることができる。手や体を使って砂遊びをする際に、裸足になって砂の感触を楽しんだり、足で周りの溝を固めている友達を見て、同じように裸足になることで、楽しさを共有することになったりする。また、裸足になったことで、遊びがダイナミックになり、直に山の斜面を裸足で掘る行為を、友達に知らせる姿は、裸足の気持ちよさを言葉で表現する力に繋がっていると考える。

2つ目の育成することとされている資質・能力は「(2) 身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、自分自身や自分の生活について考え、表現することができるようにする。」である。この目標に関しては、砂場遊びの中でごっこ遊びを行う際、自分の生活を取り入れ、

自己表現することに対応していると考え。例えば、ままごと遊びにおいては、子ども自身の経験が語られることが多く、お母さんがご飯を作ったり、お姉さんが手伝ったりしたりしている状況を再現し、砂を利用して、ご飯やケーキ等を作る場面を観察することができる。

(2) 生活科の各学年の目標および内容

ここでは、生活科の各学年の目標と内容について、砂場を関連させて検討する。

① 各学年の目標

ここでは、各学年の目標と、砂場遊びでの経験との関係について検討する。1つ目の目標は次の通りである。

- (1) 学校、家庭及び地域の生活に関わることを通して、自分と身近な人々、社会及び自然との関わりについて考えることができ、それらのよさやすばらしさ、自分との関わりに気付き、地域に愛着をもち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするようにする。

地域に愛着を持ち自然を大切にしたり、集団や社会の一員として安全で適切な行動をしたりするという点において、砂を集めて作った砂場という危険なものが少ない自然環境の中で、関わり合う楽しさを感じ、体全体を使って、自然な素材として砂に触れながら安心して遊ぶことができる。例えば、砂遊びの中で貝殻拾いをしている時に、周りの自然物を使って遊びに取り入れることもある。自然の中にある植物や貝殻などを大切にしている気持ちを持ち、遊びの中に利用することができる。

また、砂場遊びをする際に、安全な遊び方やルールなどを覚えることも多い。例えば、おもちゃを投げて遊ばないことや、砂場遊びをした後は必ず手を洗うことなど、経験を積み重ねながら、行動できるようになる。

2つ目の目標は以下の通りである。

- (2) 身近な人々、社会及び自然と触れ合ったり関わったりすることを通して、それらを工夫したり楽しんだりすることができ、活動のよさや大切さに気付き、自分たちの遊びや生活をよりよくするようにする。

砂場遊びで砂の不思議さやおもしろさや、自然の大切さなどに気付くことができる。例えば、ボウルの型抜きをして上手にできたことで自信を持ち、繰り返し作ることに挑戦し、無限に遊ぶことができる。また、山を作ると次にトンネルや道を作り、さらには町全体を作ることへと発展する。その中で、自分なりに工夫し、砂場遊びが

発展していく楽しさを知り、さらなる遊びへとつなげていくことができる。

②各学年の内容

生活科の各学年の内容の(5)と(6)において、砂場遊びが関連していると考えられる。

まず、内容の(5)は以下の通りである。

- (5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事に関わったりするなどの活動を通して、それらの違いや特徴を見付けることができ、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わること気付くとともに、それらを取り入れ自分の生活を楽しくしようとする。

身近な自然の違いや特徴を見付けることができるという点や、自然の様子や四季の変化、季節によって生活の様子が変わること気付くという点が、砂場遊びに結びついている。自然の中での活動を通して、四季の変化を感じたり、特徴に気付いたりすることができる。そして、それぞれに合わせた遊びを展開することができる。例えば、砂場遊びで裸足になって遊ぶことなどから、暖かい季節は裸足になって、日に焼けた砂のあたたかさを感じ、寒い季節には砂や水の冷たさを感じることができる。水たまりや川を作って遊んだり、泥団子作りや型抜き遊びをしたりすることも、特に冬場では敬遠してしまう。これらのことで、子ども達は四季を感じることができる。

次に内容の(6)は以下の通りである。

- (6) 身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

このことについては、以下の2つの事例を取りあげる。

1つ目は以下の通りである。

表2. 「トンネル作り」

(7月16日(木) 曇りのち雨)

事 例
<p>●Eは「じゃあ、みずながすよ」と言って水を汲みに行く。その間、●Aはトンネルの中に手を入れて確かめている。○Mはスコップで川を掘っている。</p> <p>◆Cがじょうろに水を入れて、「みずもってきたよ」言い、初めに◆N達が掘っていた穴に設置した、漏斗型のおもちゃから水を流す。○Mが水の流れた所を確かめる。</p>
<p>●Eは小さな容器に水を入れてきて、トンネルから流す。◆Nと◆Dが見ている。●Eはトンネルを「とんねるばし」と言いながら、少し壊れたトンネルを作り直し、また水を汲みに行く。○Mは所々の川をスコップで叩いて固める。</p>

上記の事例では、砂場遊びの中でトンネル作りが始まり、周りの子ども達も参加している。参加の様子も、それぞれ自分のできることを探しながら、色々な道具を持ってきたり、友達同士で関わりながら動いたりしていることから、それぞれが自己実現している様子が伺える。自分の思いや願いを実現するために表現することで、次への活動に向かう意欲や自信、挑戦する姿を出せるようになる。

2つ目は以下の事例を通して、検討する。

表3. 「泥団子作り」

〈7月15日(水)曇り〉

事 例
○Aがボウルを持って来る。ボウルに砂を入れ、○Bのバケツに入っている水をスコップですくって、ボウルに入れる。
○Aは砂場の端に移動し、木枠の上の乾いた砂をパラパラとボウルの砂にふりかける。その後、砂場の真ん中に移動して、砂を選びながらボウルの中に入れた。時折、砂の状態を指で確認している。

砂場遊びや遊びに使う物を工夫して泥や泥団子などを作ることができる点と、その面白さや自然の不思議さに気付くという点で、生活の中で自然の事象を活用して工夫する力を身に付けたり、砂場遊びを発展させつつ、自然の不思議さを発見したりすることができる。例えば、初めて泥団子作りをした頃は、泥を固める際にどのような状態の砂を固めればいいのか、分からなかったはずである。その後、何度も挑戦したり、周りの友達や保育者に教えてもらったりしながら、湿り気のある砂が泥団子作りに適していると気付くことになる。さらには、乾いたさらさらの砂を加えることで、泥団子が完成することに繋がっていく。

友達と楽しみながら、遊びを創り出そうとするという点で、砂場遊びは砂という材料を介して、周りの自然物や友達との関わり合いを通し、様々な遊びを日々、創り出していることが分かる。

4. 理科と砂場遊び

第3年生から第6学年までの「理科」について、学習指導要領が示す事項を、砂場遊びの内容と関係している部分について検討する。

(1) 理科の目標

理科で育成することとされている、3つの資質・能力のうち、砂場遊びに関わると考えられるものは、以下の2項目である。

1つ目は「(1)自然の事物・現象についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。」である。この目標に関しての事例は、以下の通りである。

表4. 「泥遊び」

〈7月21日(火)曇り時々晴れ時々雨〉

事 例
◆Cと◆Aが2人で、容器の中にスコップ(大)で砂を入れている。
◆Aが水を持ってくると、漏斗型のおもちゃから入れ、◆Cは中の様子を見て、おもちゃを外す。そして、砂を入れて泥をこね、上から手で叩いてまた、水を入れることを繰り返す。

この事例では、初め容器の中にスコップで砂を入れることから徐々に、遊びを継続していく中で、砂に水を入れたり漏斗型のおもちゃを加えてみたりして、砂の変化を観察しながら遊びを発展させていることが分かる。砂場遊びの経験を通して、砂に水を加えることによって、流れたり、固まったりするなどの砂の変化を知ることができる。また、砂から泥を作ることで、砂と水の分量の調整を学び、理科の基礎となる見方や考え方を身に付けることができる。

2つ目の「(2)観察、実験などを行い、問題解決の力を養う。」という目標では、砂場の中の砂の状態を観察し、乾燥した砂や、湿った砂があることを知り、砂の状態の違いに気づき、その理由を不思議に感じることがあるだろう。さらに、砂と水を混ぜることなどいろいろな遊び方を試すことで、自然の法則を理解できるようになると考える。例えば、砂場での泥団子作りについて、周りの友達が作っている様子に関心を持ち、自分も作ってみたいと思うようになり、見よう見まねで作ってみたい、友達に教えてもらったりしながら、何度も繰り返すことで、上手に作る事が可能となる。あるいは、失敗を繰り返すことは、挑戦の気持ちを培うことにつながる。こうして問題を解決し、挑戦する気持ちを持てるようになると考える。

(2) 理科の各学年の目標および内容

ここでは、理科の各学年の目標と内容について、砂場遊びの内容を関連させて検討する。

① 第3学年の目標と内容

第3学年の目標「(2)生命・地球」が、砂場遊びと最も関連している。以下では、目標のうち関連している項目について検討する。

その項目は以下の通りである。

(2) 生命・地球

- ① 身の回りの生物、太陽と地面の様子についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
- ② 身の回りの生物、太陽と地面の様子について追究する中で、主に差異点や共通点を基に、問題を見いだす力を養う。

この目標と内容については、以下の事例に基づいて検討する。

表5. 「富士山・火山遊び」

〈7月8日(水)曇りのち晴れ(大雨後)〉

事 例
◇Gもスコップ(大)を持って山作りを手伝っていると、○Kが「ふじさんね」と言っている。
●Fと◆Hが周りを掘っていると。○Kが山を固める。 ●Fもスコップを使って山を滑らかにしている。時々、山の頂上をスコップで押さえる○Kに、「かざん」と言う。 ○Kはスコップの裏で山の周りを固める。「くもりのなかでこうだから」「すべりだいじゃなくていい」など、いろいろと言いながら固める。そして「ふじさんって、しろいこながまわりにあるよ」と言い、また固める。 ◆Hも山の周りを掘っている。

上記では、特に太陽と地面の様子に注目している。砂場では日なたと日陰に着目して、砂の状態の違いを発見し、砂遊びに利用することができる。例えば、乾いた砂であれば、山作りの仕上げのさらさらの砂として頂上にかけることで、富士山のような山を作ることができ、湿った砂であれば、山作りの土台の部分に使うことなどができる。○Kが山作りをする中で、乾いた砂があることに気付く、富士山を作りたいことを提案したり、山を作りながらその日の天気曇りということに気付いたりしている。砂や地面の状態に適した遊びを選択する経験をしていれば、それが太陽の動きと関連していることに、容易に気付くことができる。

② 第4学年の目標と内容

第4学年の目標では、「(2) 生命・地球」の以下の2項目が、砂場遊びと最も関連している。その2項目を抽出する。

1つ目は以下の通りである。

(2) 生命・地球

- ① 人の体のつくりと運動、動物の活動や植物の成長と環境との関わり、雨水の行方と地面の様子、気象現象、月や星についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能身に付けるようにする。

- ② 人の体のつくりと運動、動物の活動や植物の成長と環境との関わり、雨水の行方と地面の様子、気象現象、月や星について追究する中で、主に既習の内容や生活経験を基に、根拠のある予想や仮説を発想する力を養う。

雨水の行方と地面の様子に関する点で、砂場遊びの中で意図的に水を流して遊ぶことで、砂の穴の中への水のしみ込み方や流れ方、あるいは水の量による水たまりの状態などを実験し、観察することができる。

2つ目は次の通りである。

B 生命・地球 (3) 雨水と地面の様子

雨水の行方と地面の様子について、流れ方やしみ込み方に着目して、それらと地面の傾きや土の粒の大きさとを関係付けて調べる活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のことを理解するとともに、観察、実験などに関する技能を身に付けること。

(ア) 水は、高い場所から低い場所へと流れて集まること。

(イ) 水のしみ込み方は、土の粒の大きさによって違いがあること。

イ 雨水の行方と地面の様子について追究する中で、既習の内容や生活経験を基に、雨水の流れ方やしみ込み方と地面の傾きや土の粒の大きさととの関係について、根拠のある予想や仮説を発想し、表現すること。

このことについては、次の事例を通して検討する。

表6. 「泥遊び」

〈7月21日(火)曇り時々晴れ時々雨〉

事 例
◆Cが、水の流れる様子を見ている。そしてまた、砂を入れる。砂があふれても容器にかけ「どんどんかたまっていく」と言う。
◆Aが水を持って来ると、また漏斗型のおもちゃを容器に挿し、◆Cが水を流し、砂を入れている。◆Aは隣のバケツにじょうろの余った水を流し込んでいる。今度は◆Cがバケツの中に砂を入れ始め、水を手で触りながら砂も入れ、◆Aも砂と一緒に入れ、「なんかすらいむみたい」と言う。そして、◆Aが「ねえこれを、こんなかにいれる」と言うと、◆Cが水入れの容器に入った泥を、バケツに入れ始めるが、固まって入らない。◆Aが容器の中を「ちょっとみて」と指し、◆Cも見て、バケツの中に、水入れの容器のものを入れ始める。

砂場遊びの中で、特に「ア」の(ア)と(イ)の部分で、泥遊びの中で水を流し、砂に水がしみ込み固めることの観察と、砂場に穴を掘って、その穴に水を溜めることの観察から、

砂と水の状態の違いに気付くことができると考える。水を使う意図にも、「固める」と「溜める」の違いを意識して遊ぶことを通して、砂の変化の予想や仮説を立てることができるようになる。

③ 第5学年の目標と内容

第5学年の目標では、「(2)生命・地球」の以下の2項目が、砂場遊びと関連している。2項目について、検討していくこととする。

1つ目は以下の通りである。

(2) 生命・地球

- ① 生命の連続性、流れる水の働き、気象現象の規則性についての理解を図り、観察、実験などに関する基本的な技能を身に付けるようにする。
- ② 生命の連続性、流れる水の働き、気象現象の規則性について追究する中で、主に予想や仮説を基に、解決の方法を発想する力を養う。

事例2. 「トンネル作り」のように、特に流れる水の働きについて、子ども達は砂場遊びの中で何度も砂や水を使って遊びながら、水の流れを確認してどのようにすれば流れるのかを学んでいると考える。

2つ目は次の通りである。

B 生命・地球 (3) 流れる水の働きと土地の変化
流れる水の働きと土地の変化について、水の速さや量に着目して、それらの条件を制御しながら調べる活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 次のことを理解するとともに、観察、実験などに関する技能を身に付けること。

- (ア) 流れる水には、土地を侵食したり、石や土などを運搬したり堆積させたりする働きがあること。
- (イ) 川の上流と下流によって、川原の石の大きさや形に違いがあること。
- (ウ) 雨の降り方によって、流れる水の速さや量は変わり、増水により土地の様子が大きく変化する場合があること。

第4学年と同様に、砂場での経験を通して、水の流し方や溜め方によって、砂の働きが違うことを知ることができる。また、砂の状態を観察することで(ア)の「土地の侵食」や「堆積」の様子を理解できるようになる。このことについて、例えば、砂場での川作りやダム作りの遊びのように、水を流すことで水の流れに沿って川ができることと関連して、侵食を知る。砂場での川作りや事例

2. 「トンネル作り」などから、砂場に大量の水を流すことで、勢いよく流れた先に、砂が積もる様子を観察することから、堆積について経験するなど流れた後の上流と下流で、砂の状態が異なることも観察できる。

5. まとめ

本研究では、これまでの幼稚園の砂場遊びにおける子どもの経験の分析を踏まえて、小学校学習指導要領（平成29年3月告示）を、砂場遊びの文脈で捉え、その有効性を示した。

学習指導要領の「生活科」の観点では、砂場遊びの経験を通して、自然の中での遊びの楽しさや、ルール、人との関わり方を身に付けたり、知識及び技能の基礎を学び、生活習慣を身に付けたりすることができる。また、学びに向かう力、人間性等を養うこと、つまり自分に自信を持ったり、毎日の生活を充実させたりすることができる。

「理科」の観点では、砂場で砂から泥を作ることで、砂と水の分量の調整を学び、理科の基礎となる見方や考え方を身に付けることができる。また、砂や地面の状態に適した遊びを選択する経験をし、太陽の動きなどに、容易に気付くこともできる。砂場に大量の水を流すことで、勢いよく流れた先に、砂が積もる様子を観察することから、堆積について経験でき、さらに、流れた後の上流と下流で、砂の状態が異なることを観察できる。また、深い穴を掘って、砂場の下にあるもともとの土を観察することで、地層を知ることができたり、砂場で水を流すことで堆積した部分を見て、砂の層ができたりすることなどを確認することができる。

このように本研究は、幼稚園・保育所・認定こども園・小学校連携として砂場での遊びや学習を一貫して捉えることにより、子ども達は就学前の遊びを小学校における学習につなげることができると考えられる。例えば、小学校でのスタートカリキュラムの中に、1、2年生の生活科の授業などの教材として、砂場での活動や、砂場遊びを展開させることで、幼稚園や保育所などからの移行を、スムーズにすることができるだろう。

今後は、本研究の成果をふまえて、子ども達の砂場遊びの目的や意味を、保育の5領域の観点で捉え、さらに小学校で学ぶであろう内容を想定しながら、環境づくりに取り組みたい。例えば、砂場の道具などの設置について、子どもの意見を取り入れながら、道具の種類を検討すること、あるいは、砂場遊びをする子どもの状況や季節なども考慮することなど、道具を置かないことも含めて、年間を通した環境の計画を立ててみたい。

さらに、砂場遊びの観察、事例の収集と分析を積み重

ねて、砂場遊びに対する子どもの関心の持ち方、遊び込む時の状況の把握とその内容の理解、砂場遊びとその他の遊びとの関係などについて、さらなる研究の深化と充実を図る。また、縦断研究として、ある子どもの幼稚園入園から進級までの1年間や、入園から卒園までの2年間、もしくは3年間の砂場遊びの観察を行い、砂場遊びの変化を解明したい。

6. 引用・参考文献

- カイヨワ, ロジェ (多田道太郎他訳) 『遊びと人間』 講談社、1990年。
- 笠間浩幸「子どもの遊び環境としての〈砂場〉－砂遊びから見る子どもの発達と〈砂場〉の役割－」『環境教育研究』第1巻第1号、1998年、113-124頁。
- 笠間浩幸『砂場と子ども』 東洋館出版社、2001年。
- 小谷宜路「幼児教育における『砂場』の教育的意義に関する研究－幼児の育ちを捉える視点と環境を構成する視点－」『埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要』第12号、2013年、45-52頁。
- 佐藤郁哉『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』 新曜社、1992年。
- 志水宏吉編『教育のエスノグラフィー 学校現場のいま』 嵯峨野書院、1998年。
- 林安希子『幼児教育のエスノグラフィー 日本文化・社会の中で育ちゆく子どもたち』 明石書店、2019年。
- フルガム, ロバート (池央耿訳) 『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』 河出書房新社、1990年。
- ホイジンガ, ヨハン (里見元一郎訳) 『ホモ・ルーデンス－文化のもつ遊びの要素についてのある定義づけの試み』 講談社、2018年。
- 箕輪潤子「砂場遊びに関する研究動向と今後の展望」『川村学園女子大学研究紀要』第22巻第1号、2011年、197-204頁。
- 宮内洋『体験と経験のフィールドワーク』 北大路書房、2005年。
- 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成29年3月告示)』 東洋館出版社、2018年。
- 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成29年3月告示) 解説 理科編』 東洋館出版社、2018年。
- 文部科学省『小学校学習指導要領 (平成29年3月告示) 解説 生活編』 東洋館出版社、2018年。
- 結城恵『幼稚園で子どもはどう育つか―集団教育のエスノグラフィー―』 有信堂高文社、1998年。